

『遠山』の子孫が雄英でヒーローを目指すそうです

LuckRiver

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

『武装探偵』——通称『武偵』。

かつて人類に『個性』という超能力が芽生え、犯罪が増加した、個性黎明期。

その混乱のなか活躍し5年程で姿を消した幻のチーム『バスカービル』のリーダーだった『遠山』の武偵——『エネイブル』。

そして数世紀が経過し、プロヒーローによって秩序が築かれた今、『遠山』の血を引く少年『遠山 零』、そして消えた『バスカービル』が再び表舞台に現れようとしていた……！

注意：主はヒロアカはにわか、緋弾は18巻（1話時点）の知識で書いています。

ただしストーリー、キャラでは緋弾は10巻までを拾うつもりですのでご了承ください。（但し技や、一部キャラ、イロカネ絡みなど設定は拾う可能性があります）

リハビリ作です。おそらくn番煎じの上、文章力が死んでいたり、不定期更新になると思いますが、どうか温かい眼で見守ってください。

# 目次

再装填 1	1
生まれ入学試験	3
ガンバレ入学試験	6
遠山 零／ビギニング	13

## 再装填1

——数世紀前、突如として、この世界の人々に『個性』というものが現れた。

超能力のようなそれらは、時に人類の発展を促し、時に人類の多様化を引き起こし、そして……

多くの犯罪の凶器となった。

そんな個性黎明期には、様々な人々が個性犯罪に抗うべく戦った。秩序<sup>警</sup>を以て個性と戦<sup>軍</sup>う者、武装<sup>武</sup>と己が技術<sup>装</sup>を以て個性と戦<sup>偵</sup>う者。個性<sup>ザイ</sup>を以て個性<sup>ラ</sup>と戦<sup>ン</sup>う者、

自分や家族の身を守るためなら殺しさえ厭わない、血で血を洗う個性黎明期。

そんな中、少しヒーローヲタクなら知らない者はいない、『原初のプロヒーローの一人』にして『極東最強の武偵』がいた。

ヒーロー事務所システムの元となったと言われる十数人のチーム、『バスカービル』。

そのリーダーだった、【不可能<sup>エ</sup>を可能<sup>ネ</sup>にする男】『遠山』。苗字と二つ名、そして輝かしい経歴以外の殆どが謎に包まれた武偵だった。

そして『プロヒーロー』の出現によって秩序を取り戻した現在、『遠山』の血を継いだ少年が雄英へと入学しようとしていた。

「零、受験票は持ったか？あとベレッタは？それとバタフライナイフも持ったか？」

「大丈夫だ、父さん。全部持った」

その名は『遠山 零』——遠山<sup>エ</sup>キンヅの義理の息子である。

「父さんは心配性だな。俺ももう高校生なんだが」

どう見ても20代後半にしか見えない父さんに見送られて、僕は雄英の受験会場へ向かった。

あれでも数世紀前に並み居る無法者たちを倒した、極東最強の武偵なんだけどな。

『武装探偵』、通称『武偵』。

シャーロック・ホームズを原点とし、ヒーローの誕生のはるか前から存在する、銃器などで武装した探偵（というより傭兵）たちのことだ。

個性黎明期には、各地で活躍した武偵の記録が残っている。

武偵には武偵高という養成機関があり、アサルト強襲科、インクスタ探偵科、インフォルマ情報科など、それぞれの学部に所属して、大抵何かに特化した武偵になるのが特徴だ。

勿論、今でも武偵は多く存在する。

が、学力が低い人々が多く、武装をしていることや、武装をメインに扱う特性上『ヒーローになりそなつた没個性』がなるものというイメージがあり、荒くれ者として扱われることが多い。

実際問題、そういう奴が多いのも事実だ。勿論、全員ではないが。

そんな考え事をしていると、最後の試験会場に着いたようだ。

武偵高に対してヒーローを養成するこの『雄英高校』ヒーロー科、その最終試験である実技試験だ。

俺は腰のベレッタM92を撫でた。

## 始まれ入学試験

実技試験の前に、俺たち受験生は、大きな講堂のような場所に通された。

ぎつしりと詰まった受験生たちの前に現れたのは、金髪が殆ど地面と垂直に立っている男性だ。もはや『重力無視』の『個性』だろ、アレ。

「今日は俺のライブへようこそー！エヴィバデイセイヘイ！」

妙にテンションの高いその金髪の男性はどうやらこの試験の解説を担当するらしい。

正直鬱陶しいな、これ。

「こいつあシヴィー!!受験生のリスナー！実技試験の概要を説明するぜー！」

どうやら返事を期待していたらしい彼は口だけで落ち込みつつも、実技試験の解説を始めた。

パンフレットによると、4種の仮想敵ヴァイランとなる機甲が存在する。

そして種類によって1P、2P、3Pのポイントがそれぞれ割り振られ、試験時間内の撃破合計ポイントで、得点を決めるということらしいな。

説明を聞き終わったところで、金髪の人が質問を募ると男子受験者が手を挙げた。

「プリントには4種の敵が記載されております！もしこれが誤載だとすれば日本最高峰の雄英として恥ずべき痴態！我々受験者は規範となるヒーローのご指導を求めてここにいます！」

いや、よくそこまで舌が回るな。というか受験する高校の教師にその言い方はだいぶどうかと思うけどな・・・

「ついでにその縮毛の君！さつきからボソボソと・・・気が散る！物見遊山で受験するつもりならここから去りたまえ！」

辛辣だな。しかもよりにもよって他の受験生の個人攻撃とか・・・

ヒーローのすることか、と思わなくもない。

その上、後半の去りたまえ云々に至っては教師が言うことだろう。何様のつもりだ、と正直思うな。

しかしその後の回答は俺にとっても有益だった。

OP 敵という妨害が少数出現するということらしく、遭遇すれば厄介なことになるだろう。

講堂を出て会場に向かう途中、俺は例の縮毛の少年を見かけた。

「災難だったな。受験、お互い頑張ろうぜ」

「ど、どうも・・・あっ！もしかして、えーっと、お名前は？」

「俺？俺は遠山とみやま 零れいだ。そっちは？」

「ぼ、僕は緑谷 出久です」

あの・・・やっぱりあの『エネイブル』の血縁の方ですか？」

なんでわかったんだろうな。いや隠すようなことでもないんだが。

「ああ。俺はあの『遠山』の息子だが」

「やっぱり！なんて幸運なんだ。顔が似てるとは思ったけどあの『遠山』の子孫だなんて。でも数世紀前の個性黎明期以降すっかり姿を消したらしい遠山の息子が急に雄英に入るのかな？しかも『エネイブル』本人は『プロヒーロー』と呼ばれることをそこまで好んでいなかったというのが専らの考察だし武偵高じゃなくて雄英に来るものなのかな・・・？いやでも

「だ、大丈夫か？」

「い、いえ大丈夫です！」

俺は聞いてなかったがこれが噂の『ボソボソ』か。考え込むと周りが見えなくなるのは戦場で危険だけど大丈夫か？

そろそろ会場に着く。敵同士だがお互い四面楚歌だ。せめてエールの一つぐらいは送っておこう。

「頑張ろうな、緑谷。一人のヒーロー見習いとして応援してるよ」

「・・・うんっ！遠山君もがんばって！」

つかの間の友情を噛みしめた俺は、スタート位置へと向かった。



## ガンバレ入学試験

多くの受験生たちがスタート位置に集まり、今か今かとスタートを待っている。

ざわざわと聞こえる声は意識から排除し、実際の会市街地フィールド場を前に自分に合った戦法を考える。

俺が戦略を固めたその時。

「ハイスタート！」

プレゼント・マイクの声が唐突に響いた。

いや、唐突だな。少し遅れたが体に染みついた反射で反応し、スピード命の作戦を生かすべく全力で走り出す。

「ほらほらあー！実戦じゃカウントなんかねえんだよ！走れ走れえ！賽は投げられてんぞー！」

しかし皆スタートが遅い。気になっていたが、多くの受験生たちはためらっていたのか。

『遠山』として生きた教育を受けてきた俺には分からない感覚だな。

そして多くの仮想敵サイランをスルーして奥の方へと走る。

当然、多くの仮想敵サイランが俺にヘイトを向け、奥の方に着いた時にはもう俺は囲まれた状態になっている。

とはいっても、これは試験。そこまで一人に集まっては試験にならないので、集まってきたのは合わせて8機程度だ。

俺は腰のベレッタM92を抜いて、直撃すれば当たり所によっては骨が折れる程度の威力がある、強化ゴム弾の入ったマガジンを装填する。

彼我の距離はおよそ10m。

両手で構えているこの射撃姿勢であれば、まず間違いなく命中できる。

パァン！という破裂音が連続する。

できるだけ近いロボットの、脆い部分を狙って発砲する。

ベレッタM92の装弾数は15発。

1機に3発ずつ発砲しているため、3機ほど仮想敵がこちらに進み、あるいは射撃してくる。

落ち着いて回避、そしてマガジンを交換し突進のモーションに入っている仮想敵から撃破していく。

案外ロボットは脆いようだ。さくさくと撃破することができる。

しかしそれは他の受験生も同じ。そしてヒーロー科の倍率は、尋常でなく高いらしい。

俺は次の獲物を探して駆け出した。

試験時間が3分を切ったところには、5つの強化ゴム弾マガジンはすべて撃ち尽くしていた。

他の受験生にも疲労が見て取れる。俺は突進してきた敵を一度躲して距離を詰める。

そして、現状の『バスカービル』の拠点（＝父さんの家）によく来る凄腕の武偵、アリアさんから教わった『バーリ・トワード』という格闘術で破壊する。

そんな、試験も終盤の時だった。

巨大な鋼鉄の巨人が、街中に現れたのは。

「あれがOP敵か・・・」

逃げ惑う受験生たち、迫りくる敵。本当にでかいな。

あんなの相手にしてられん。俺も逃げようと踵を返したとき。

「・・・緑谷?」

俺は道にへたり込んでいる緑谷を見つけた。

すっかり腰が抜けていて、悪いがヒーローには見えない感じだがな。

そんなことを考えていた俺に緑谷が口を開いた。

「!遠山くん!まずい、逃げ」

ないと、という言葉は続かなかった。

ドゴオ!!という轟音。

俺の背後で腕を振り下ろした0P 敵サイランの一撃、その轟音が聴覚を奪ったからだ。

咄嗟に顔を覆った。俺よりだいぶ後ろの地面を殴ったようだが、砂塵と岩礫が巻き上がり、俺の方へ飛んでくる。なんて威力だ・・・！戦慄を禁じ得ない。死人が出そうだぞ、これ。

しかし、顔を覆ったのは判断ミスだった。

視界を奪われている俺に、脇から飛び出してきた3P 敵サイランが突進をぶつけてきた。

衝撃が俺を襲う。思ってたより痛いぞ、これ。

両腕でガードするも、少し吹き飛ばされてしまった。

しかし重要なのはそこじゃない。

ああ、俺に攻撃したな？

お前は・・・俺に命の危険をもたらす敵だ。

ああ、なっていく。あのモードに・・・!!

ギユゴツ!!

零の右腕が消えたと同時に吹き飛んだ3P 敵サイラン。・・・出久にはそうとしか見えなかった。

しかし、出久の知識と、『遠山』、そして霞むほど速く動いた腕で出久は答えを導き出した。

「まさか・・・今のが『エネイブル』が使ったって言われている『亜音速打撃技』!？」

「緑谷、よく知ってるな。その知識量に敬意を払って教えよう。今の  
が遠山に伝わる超高速の打撃技『桜花』だ」

ああ、なっちまったか。ヒステリア・アゴニザンテに。

遠山に代々伝わる特異体質——ヒステリア・サヴァン・シンドローム——通称HSS。

HSSは子孫を残すため、『βエンドルフィンの分泌量の増加』をはじめとする、いくつかの状況下で反射速度、思考力などが数十倍に跳ね上がる特異体質である。

そのうちの一つが『ヒステリア・アゴニザンテ』、通称『死に際のヒステリアモード』。

死につながるダメージを受けた際に発動するヒステリアモードだ。しかし、俺はいわば極度に死を恐れる体質があり、かすり傷程度のダメージを敵から受けただけでも、10.000001%でも俺を殺す可能性がある敵と戦闘している」と判定した時点で『ヒステリア・アゴニザンテ』が発動するのだ。

さらに出てくる5体の仮想敵<sup>ヴァイラン</sup>。しかし先ほどとは違い、遠距離武器を装填した3P敵が多い。

俺は予備として持っていた艶消し銀の<sup>マッドシルバー</sup>コルト・<sup>ピースメーカー</sup>SAAを抜く。

OP敵が再び構えるまでの短い間が勝負だ。俺は一気に駆け出す。もちろん、仮想敵<sup>ヴァイラン</sup>は俺に射撃してくる。確認できたのは——計14発。

走りながらの不安定な姿勢だが落ち着いて判断する。各所からの14発の弾丸の内、俺に当たるコースは8発。

ピースメーカーの弾数は6発。——余裕で事足りる。

俺は走りながら、ピースメーカーをぶつ放す。

ピースメーカーが吐き出した6発の強化ゴム弾は、綺麗に銃弾を撃

ち抜き逸らす。

さらにそのうち2発は——跳ね返った弾道上で別の弾を逸らす。銃弾撃ち。そしてうち2発は連鎖撃ち。

武偵としての『遠山』が持つ人間離れた銃技だ。

そして近づいたところで亜音速の『桜花』が炸裂する。

さらに倒した仮想敵を盾にして次の相手に『桜花』。

それを繰り返して、密集していた4機を10秒程度で行動不能にできた。いい戦果だ。

あと1機は撤退したのか、周りに姿が見えなかった。

「さて、邪魔な敵も排除したし、逃げるか」

そう呟き今度こそ逃げようとした俺。

しかしそれを止めたのは、緑谷の一言だった。

「瓦礫の下に人が！」

先ほどの一撃で倒壊した建物の瓦礫。そこに、足を挟まれて動けなくなっている女の子がいた。

必死にもがいているが、OP敵はすぐそこだ。

凶器を再び持ち上げたOP敵。俺が覚悟を決めたとき——

バァン!!

ヒステリアモードでなければ捉えられないほどの速度で飛び出していった人がいた。

上空、巨大なOP敵の顔面のすぐ前。

大きく腕を振り上げ、全身に力を滾らせていたのは、さっきまでとは見違えた覚悟を秘めた緑谷だった。

「Sマアアアアツ Mマアアアアツ Aマアアアアツ Sマアアアアツ H!マアアアアツ」

NO1ヒーロー、オールマイトを彷彿とさせる掛け声と気迫で放たれた緑谷渾身の一撃は、その掛け声に恥じない圧倒的な威力でOPウイラン敵を倒した。——おいおい、マジかよ。

それを見上げながら、俺は女の子を挟んでいた瓦礫を右足の『桜花』で粉砕。

すると、やがて上から緑谷が落ちてくる。

どの技を使えばいいか考えていると(思考速度数十倍)、さっきの女の子が駆け出した。

何らかの『個性』で緑谷くんを助けるつもりなのだろう。しかし、詰めが甘い。——彼女も、俺も。

残り1機の敵が狙っていたのは、彼女だったのだ。

そして今、敵が狙っているのは——空中の一撃のあと、回避行動のとれない緑谷。

本来こういうときのための保険であるピースメーカーは弾切れ。ベレッタM92は言わずもがな。

接近して攻撃するには、距離がありすぎる。

状況的に今の俺にできるのは、これしかない！

僕は足元の装甲板を拾う。

そしてさっき粉砕した瓦礫の丸っこい野球ボール程度の欠片を、金属板を当ててからスナップするようにして『桜花』で撃ち出す！

亜音速で射出される超高速のコンクリ球は己もろとも機甲を粉砕する。

これで俺の仕事はした。俺は少し早いが入りゲートに向かって歩く。——正直もう眠い。

さっきの少女は無事に緑谷に近づき、彼女が平手打ちした瞬間、緑谷は落下の勢いを失い、無事に着地できたようだ。今度こそ『重力無

視』の『個性』か。  
俺はそんな光景を遠目に見ながら、試験終了を告げる合図を聞いた。

## 遠山 零／ビギニング

緋弾雄英

数日後。

俺の家に雄英から合否通知の手紙が届いた。

最初は俺の部屋で開けようと思ったのだが、

「どうせ落ちてないんだから平気平気♪」

とカナ姉に奪われた。解せぬ。

カナ姉ー正しくは父さんの兄、遠山金一。

彼は「自らが理想の異性へと化ける」ことでヒステリアモードに変化する。それがガチ性癖なのかどうかは未だ定かではないがな。

そして金一兄さんに限らず、ヒステリアモードになった際に人格が変わる場合がある。

金一兄さんははつきり分かれるタイプで、HSS発現時の女性的な人格が「カナ」だ。

そんなカナ姉はダンスでも踊るように走っていき、広いリビングへ俺の合否通知書を持っていった。

仕方なく俺はそのリビングで手紙の封を切る。すると中には小型の投影機が入っていた。俺はさっと検分してから起動する。

「私が投影されたー！」

そして投影されたのはオールマイトロー今の日本におけるNO.1ヒーローだ。

「おおくやるねえ」「すげえな、NO.1ヒーローが合格通知か」「これ：全員にしているのか」

軽い歓声は『バスカービル』の初期メンバー、『峰 理子』さん。

派手さに驚いているのが『バスカービル』がヴィランとの戦いを始めてから加盟した『武藤 剛気』さん。



そしてなんとも現実的&庶民的な感想を漏らしたのが父さんだ。

しかしそれどころじゃない。これから俺の人生の分岐点が待っているのだから……！

「遠山 零くん、筆記はどれも合格点、特にヒーロー史では上位十人に入る高得点。

そして実技試験では敵Pは48P。さらに審査制の救助Pは24点！

文句なしの合格だ。

来いよ遠山少年……ここが君の『ヒーローアカデミア』だ」

それを聞いた瞬間、思わず安堵の溜息を漏らした。

いや、良かった。落ちたらこれまで父さんや勉強を教えてくれたジャンヌ姉さん、そしていろいろ無理言った中学の皆に顔向けできなくなるどころだった。

「ね、言ったでしょ。落ちてるわけないって」

こつちに笑いかけながら言うカナ姉。そういう問題じゃないんだカナ姉。いやそうかも知れないけど。

そして日本ここにいない家族——ジーサード兄さんとかなめ姉にもテレビ電話で報告する。

「遅くにすみません。——というわけで雄英合格しました。」

俺が繋いだ先は、サード兄さんがアメリカに持つヒーロー事務所

【ジーサード同盟】の本拠地、最近7度目のリニューアルを行った

【ジーサードビル】だ。

いや、自分の名前好きすぎだろ。本人が決めたのか知らんが。

『よかったね！お姉ちゃん心配だったよ〜！』

そう手放しに喜んでくれるのは父さんの妹のかなめ姉。

『まあ、零が落ちるワケねえとは思ってたがな。』

そして父さん曰く『ツンデレ』のサード兄さん。同じく父さんの弟だ。

そして一緒に覗いていた【ジーサード同盟<sup>リーグ</sup>】の他の皆さんも太平洋越しに自分を祝福してくれる。有難いことだな。

そしていくつか事務的な話をした後、電話を切った。

俺の机には今日まだしなければならぬこと——ベレッツタM92とピースメーカーのメンテナンスが残っている。

俺は体に染み付いた動きで道具を取り出して分解を始める。

——机の横には、今日も中学時代の仲間の写真が飾られている。